

## 要 旨

本研究は、説明的文章の学習において、表現活動を取り入れることを通して、ものの見方や考え方を広げることをねらいとしたものである。そのために、読解指導の過程において3つの手立てを取り、指導をすることにした。まず、事実のみが書いてある百科事典と、伝えたい事柄や意見が書いてある教科書とを比べ読みさせ、筆者のものの見方や考え方を理解させた。次に、筆者の表現の仕方を追体験して紹介文を書かせ、書かせたものを他者と交流し、相互評価させた。このような手立てを取ることで、ものの見方や考え方を広くすることができた。

〈キーワード〉 ①比べ読み ②紹介文 ③相互評価

### 1 研究の目標

説明的文章の学習において、表現活動を取り入れることを通して、ものの見方や考え方を広げる読解指導の在り方を探る。

### 2 目標設定の理由

現行学習指導要領には、1年生の「読むこと」の目標として、「様々な種類の文章を読み内容を的確に理解する能力を高めるとともに、読書に親しみものの見方や考え方を広げようとする態度を育てる」<sup>1)</sup>とある。この指導事項では、生徒は、文章から筆者のものの見方や考え方を読み取り、自分のものの見方や考え方と比べることで、新たな発見をしたり、自分自身の主体的な判断を確かめたりすることが求められている。

しかし、実際の授業では、説明的文章の学習において、本文を通読させた後、段落分け、各段落の要点把握、その後筆者の考えの読み取りという方法が一般的である。そのために、生徒は、本文の内容を理解するだけに終わっていることが多い。また、生徒の学習態度は、受け身的で、自分のものの見方や考え方を広げることが十分にできていない傾向にある。このような授業を続けた結果、安藤修平は「『説明文嫌い』の子どもたちを量産させたが、『説明文』の『読みの力のついた子どもたち』を量産することができなかった。」<sup>2)</sup>と指摘する。昨今の読解力低下の問題も、このような授業を行ってきたことが原因の一つと思われる。

そこで、説明的文章の学習において、内容の理解だけでなく、文章の形式も理解させ、その上で読み取らせたことを基に、考えをもたせる必要があると考える。しかも、学習者が目的をもって意欲的に行う学習でなければならない。

本研究では、筆者のものの見方や考え方、表現の特徴を読み取らせ、それを基に、表現活動を通して自分の考えをもたせた。表現したことを相互評価させることで、ものの見方や考え方を広げることをねらいとした。

### 3 研究の仮説

説明的文章の読解指導の過程において3つの手立てを取れば、ものの見方や考え方を広げることができるだろう。

- ① 百科事典と教科書の比べ読みにより、筆者のものの見方や考え方を読み取る。
- ② 筆者の表現の仕方を追体験して、紹介文を書く。
- ③ 相互評価を行う。

#### 4 研究の内容と方法

- (1) 説明的文章における「読解力」に関して、理論研究及び先行研究を行う。
- (2) 説明的文章において、表現活動を活用した授業についての理論研究及び先行研究の調査を行う。
- (3) 授業実践（第1学年「ハチドリ不思議」3時間、「未来をひらく微生物」2時間）を行い、仮説について分析・考察する。

#### 5 研究の実際

- (1) 説明的文章の学習における表現活動について

現行学習指導要領の基本方針に「自分の考えをもち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ態度を育てることを重視する」<sup>3)</sup>とある。

そのため、説明的文章の学習において、目的をもって意欲的に取り組ませるために、「何が書かれていたか」という内容理解だけではなく、「どのように書かれていたか」という形式理解、更に読み取ったことを基に、どのようなことを考えたかという力を養う必要がある。

そこで、表現活動を取り入れることで、自分の考えをもたせ、それを相互評価させることで、ものの見方や考え方を広げる試みを行った。ここでいう表現活動とは「書く」活動として、取り組ませた。「書く」ことによって、生徒は読みを確かにしたり、深めたりすることができる。しかも、「書く」ことは個人の作業であり、目的をもたせ、意欲的に取り組ませることも期待できる。生徒は「書き」ながら考えたり、「書く」ことで、自分の考えを整理したりすることもできる。しかしそのためには、考える時間を保障しなければならない。さらに、「書かれたもの」は学習の記録となり、読み返すことで、個人の変容を確認することができる。

本実践では、「紹介文作り」で筆者の表現の仕方を追体験させ、それを他者と交流させることでものの見方や考え方を広げることをねらいとした。

- (2) 実践化への手立て

図1のような読解指導構想図を考え、実践化に向けての手立てを取った（図1）。

##### ア 比べ読み

手立て1として、比べ読みをさせた。事実のみを淡々と書き記してある百科事典と伝えたい事柄や意見が書いてある教科書とを比べ読みをさせ、筆者の考えを示す語句や、表現の工夫に気付かせ、筆者のものの見方や考え方を読み取らせた。また、筆者の表現の仕方を学ばせ、自分の表現に役立てさせた。

##### イ 紹介文作り

手立て2として、紹介文作りをさせた。読み取ったことを基に筆者の表現の仕方を追体験させ、教科書の内容に関連した紹介文を書かせた。興味のある生き物や微生物を選び、その特徴を比喩表現を使って表現させた。紹介文を書くに当っては、生き物や微生物に関する図書資料を収集し紹介文を書く際の参考にさせた。

##### ウ 相互評価

手立て3として、相互評価をさせた。まず、自己評価表に自分の紹介文を振り返らせ、特に工夫したところを記入させた。次に班内で相互評価させ、よかったところ、工夫した方がよいとこ

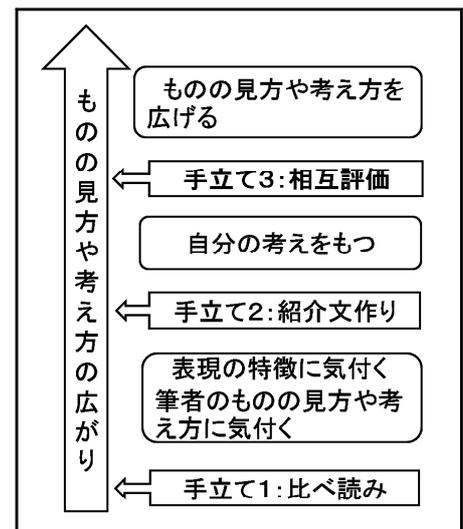


図1 読解過程構想図

ろを記入させた。その後、自分の紹介文を振り返らせ、紹介文に加筆修正させた。

### (3) 授業の実際

#### ア 授業の概要

##### (ア) 授業実践Ⅰ 単元名 「生き物の紹介文を書こう」 (全6時間)

教材文「ハチドリ不思議」(東京書籍『新しい国語Ⅰ』)を用いて、百科事典と比べ読みをさせた後、「生き物の紹介文」を書かせた。生き物の特徴を比喻表現させることで、文章を分かりやすくするだけでなく、自分の考えを表現させることができた。紹介文を相互評価させることで、ものの見方や考え方が広がるように手立てを取った。

##### (イ) 授業実践Ⅱ 単元名 「生活に役に立つ微生物の紹介文を書こう」 (全6時間)

教材文「未来をひらく微生物」(光村書籍『国語Ⅰ』)を用いて、百科事典と比べ読みをさせた後、「生活に役に立つ微生物の紹介文」を書かせた。生活に役に立つ微生物の働きを比喻表現させることで、文章を分かりやすくするだけでなく、自分の考えを表現させることができた。紹介文を相互評価させることで、ものの見方や考え方が広がるように手立てを取った。

#### イ 比べ読み

比べ読みは、中学校の言語活動例「様々な文章を比較して読んだり、調べるために読んだりすること」に明確に位置付けられている。今回は百科事典と比べ読みをさせた。百科事典は「学習上必要な参考知識を与える学習資料」<sup>4)</sup>であり、表現の仕方も、事実が淡々と書かれている。伝えたい事柄や意見が書いてある教科書と、比べ読みさせることで、生徒は、表現の特徴に気がつき容易に筆者ものの見方や考え方を読み取ることができると考えた(表1)。

表1 比べ読みによるマーキングした語句

	百科事典	教科書
ハチドリ不思議	生息地、形、色彩、飛行力、ミツの吸い方、羽ばたき方、産卵の仕方	経営状態、収入、支出、収支決算、自転車操業 収支、倒産
未来をひらく微生物	分布、種類、大きさ、発見者、役割	微生物の役割、環境問題の解決、地球の掃除、 掃除の役割
表現の仕方	事実が淡々と書いてある	伝えたい事柄や意見が書いてある

百科事典には事実が淡々と書かれているので、「ハチドリ」「微生物」の概要をつかませることができた。次に、生徒は、教科書を読み、百科事典に記述されていなかった語句にマーキングを行ったところ、授業実践Ⅰでは「経営状態」や「自転車操業」など、ハチドリとは一見関係のない経済的な用語が使われていることに気付く生徒が多かった。なぜ、このような用語が使われたのかを考えさせることで、筆者のものの見方や考え方を読み取らせることができた。また、比喻表現を使って分かりやすくする等の、表現の特徴にも気付かせることができた。

授業実践Ⅱでも同じような取り組みを行い、表現の特徴に気付かせ、筆者のものの見方や考え方を読み取らせた。

#### ウ 紹介文作り

授業実践Ⅰでは比べ読みで、筆者のものの見方や考え方を読み取らせた後、筆者の表現の仕方を追体験し、「生き物の紹介文」を書かせた。生徒が「生き物の紹介文」を書くためには、その生き物の特徴をとらえて、分かりやすく表現する必要がある。3段落構成の文章で、書き出しや形式を指定し、生き物の特徴を比喻表現を使って表現させるところで、自分の考えを出させるようにした。伝えたい事柄や意見を、より分かりやすくするためには、どのような比喻表現を使う方が効果的かという考えが、生徒は深まるはずである。

まず、生き物を何にするかを決めさせた。佐賀市の図書資源共有で生き物に関する百科事典な

どの図書資料をあらかじめ用意しておいた。図書資料を参考にしながら、生き物を決めさせ、その生き物の特徴を比喩表現を用いて分かりやすく表現させた。

比喩表現を使うことに慣れていない生徒は、生き物の姿形を直喩で表現したものが多く、全体の7割を占めていた。隠喩で表現したり、働きを比喩表現するなどの工夫も見られた(表2)。

表2 「生き物の紹介文」からの比喩表現の一部抜粋

比喩表現の種類	生き物名	特徴	比喩表現
姿形を直喩表現	カブトムシ	角を使って戦う様子	まるでヤリのように
	クジャク	羽を広げる様子	まるで扇子を大きく広げるように
働きを隠喩表現	カメレオン	周囲に合わせて体色変化する様子	虹色カメレオン
	カメレオン	周囲に合わせて体色変化する様子	鉄人カメレオン
働きを直喩表現	アザラシ	毛が水をはじく様子	まるでレインコートのように
	カメレオン	周囲に合わせて体色変化する様子	忍者のように

紹介文を書かせた後、もう一度教科書を読み返させ、筆者の表現を振り返らせた。「私は『生き物の紹介文』を生き物の姿形を直喩で表現したが、筆者は生きるか死ぬかのぎりぎりのところで、自転車操業などの比喩表現を使っていることが分かった。」の感想に見られるように、生徒が表現の仕方を追体験することで、筆者の表現意図にも気付いたようである。

授業実践Ⅱでも、同じような取り組みで、「生活に役に立つ微生物の紹介文」を書かせた。授業実践Ⅰでは、生き物の特徴に着目して比喩表現させたので、授業実践Ⅱでは、生活に役に立つ微生物の働きに着目させ、比喩表現を使って、分かりやすく表現させた(表3)。

表3 「生活に役に立つ微生物の紹介文」からの比喩表現の一部抜粋

比喩表現の種類	微生物名	働き	比喩表現
働きを直喩表現	乳酸菌	腸内の働きを活発にしたり、免疫機能を高めたりする	万能薬のよう
	V A菌	菌糸を伸ばし、植物に栄養を与える	糸を操る魔術師のよう
働きを隠喩表現	大腸菌	食べ物を消化する	小さな製薬工場
	酵母	糖を炭酸ガスとアルコールに変える	発酵の母

2回目ともなると、比喩表現を使うことにも慣れてきたようである。働きを直喩や隠喩で表現する生徒が増え、姿形を直喩で表現した例は見られなかった。使われている比喩表現も、授業実践Ⅰの時よりも、技巧に優れているものが多く、工夫を凝らした表現が見られた。「糸を操る魔術師のよう」や「万能薬のよう」等がその例である。直喩と隠喩の両方を使いながら、より分かりやすく表現しようとする例も見られた。「小さな製薬工場」や「発酵の母」「微生物仕かけの化学工場」等のように働きを隠喩で表現しているものが全体の2割を占めていた。微生物の働きを説明するために、より分かりやすい表現にしようと考えが深まったものと考えられる。

## エ 相互評価

紹介文を交流することで、ものの見方や考え方の広がりをおねらった(表4)。

表4 紹介文の相互評価(比喩表現を中心に)

交流前	相互評価	交流後
コウモリが獲物を捕らえる様子「暗闇のハンターみたい」	もっと鋭い表現に	「暗闇のハンター」と隠喩表現に
イグアナの鋭い歯「野生のワニがヌーや水牛をかみちぎって食べているよう」	まわりくどい。もっと分かりやすい表現に	「鋭い刃物のように」に修正

まず、自己評価をさせた。さらに、比喩表現を中心に、特に工夫したところを記入させ、班内で相互評価させた。相互評価では、よかったところ、工夫した方がよいところなどを評価カードに記入さ

せた。生徒は相互評価する中で、新たな発見や、感動、共感や批判などをしながら、ものの見方や考え方が広がったようである。その後、評価カードを基に、紹介文を振り返らせた。相互評価で出た意見を参考に、約半数の生徒が、紹介文に加筆修正し、より分かりやすい比喻表現にした。

図2を書いた生徒は、ラクダのこぶは脂肪の塊で、厳しい砂漠の生活に耐える栄養がため込まれており、水や食料がない場合にこぶが小さくなっていく様子を「風船のように大きくふくらんでいて、とてもバランスが悪いように見える。」と表現している。しかし、この生徒は相互評価で「風船は楽しいイメージを受けるので、もっとふさわしい表現にした方がよい。」という指摘を受けた。その後、考えた末、こぶを小さくしながらも、厳しい砂漠の生活に耐える様子を表すために、「鶴の恩返しのように、我が身を削りながら」という表現に書き換えた。相互評価をさせることで、ものの見方や考え方を広げさせることができたと考える(図2)。

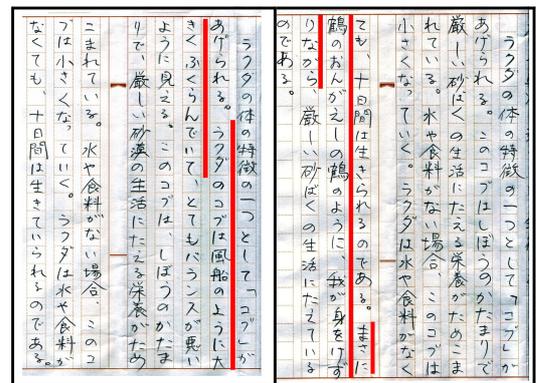


図2 生徒作品相互評価前(左)と相互評価後(右)

学習後の感想にも、「自分の比喻表現に自信があったが、友達からのアドバイスを受けて、書き直してみると、もっと分かりやすい表現になった。これからも比喻表現を上手に使えるように、普段の生活の中でも使っていきたい。」等があり、相互評価をさせることで、ものの見方や考え方を広げることができたことが分かる。

#### (4) 考察

中学1年生の同じクラス(30名)での2回の授業において、初発の感想における筆者のものの見方や考え方の読み取りの変化を考えてみた(図3、図4)。

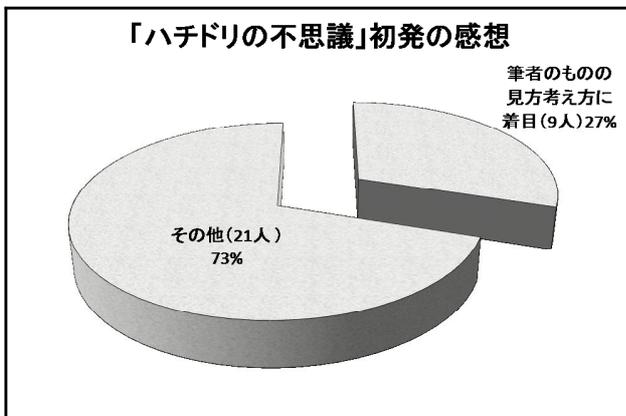


図3 筆者のものの見方や考え方に着目している割合(11月)

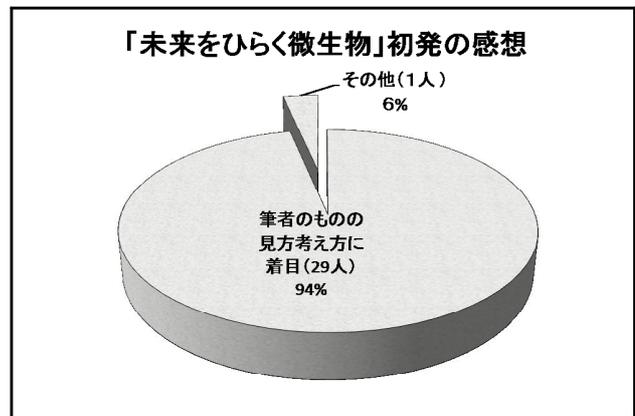


図4 筆者のものの見方や考え方に着目している割合(1月)

授業実践Ⅰの生徒の初発の感想では「ハチドリの大きさ」「生息地」「えさ」等に着目し「～は初めて知りました」という感想が多く見られた。しかし「ハチドリは少ない栄養で健気に一生懸命生きている」という筆者のものの見方や考え方に着目した感想をもった生徒が、全体のわずか27%に過ぎなかった(図3)。

授業実践Ⅱでは、生徒の初発の感想の時点で「自然の仕組みの中で掃除の役割を果たす微生物を活用することで、環境問題の解決につながる。微生物は私たちに未来をひらく技術を教えてくれるだろう。」という筆者のものの見方や考え方に着目した感想をもった生徒が、全体の97%にも達していた。筆者の表現の仕方を追体験して紹介文を書かせたことで、文章の内容を読み取る力が付い

たことが分かる（図4）。

また、授業実践Ⅰでは、初発の感想の時点で本文中に使われている比喩表現に気付いた生徒は、いなかったが、授業実践Ⅱでは、比喩表現に気付いた生徒が30人中7人いた。この授業を通して、生徒は内容を読み取るだけでなく、言葉や表現にも気を付けて読み取ることができるようになった。

このことは生徒の意識調査にも変化が現れている。単元学習前に比べて、生徒は、授業を経るごとに文章中に使われている言葉や表現にも気を付けて読もうとする意識が向上した（図5）。このような実践を続けることで、生徒に、文章の内容だけでなく、言葉や表現にも気を付けて読む習慣を身に付けさせられると考える。

図6は生徒作品例である。この生徒は「生き物の紹介文」では、北極ぎつねの毛の色を「土のような毛の色をしている」と姿形を直喩で表現していた。2回目の「生活に役に立つ微生物の紹介文」では、「フランキアは木の根に宿を借りる下宿人で、宿代の代わりに窒素という植物が育つのに大切な物質を樹木に与えて育てているのです。つまり、お互い助け合って育てているということなのです。」と表現している。この生徒は「下宿人」や「宿代」という比喩表現を使い、具体例を挙げながら、フランキアと樹木との共生関係を利用して、砂漠化を防ぐための働きを説明している。筆者の表現の仕方を追体験して、書くことによって、より分かりやすい表現にしようと、自分の考えがもてたことの表れだと考える。

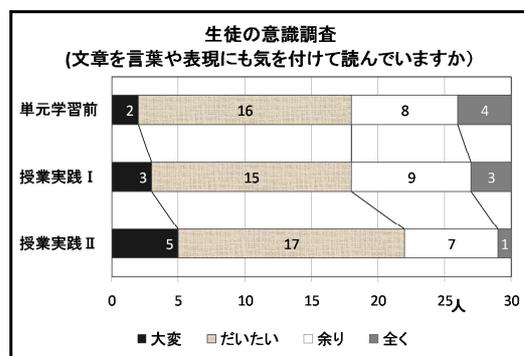


図5 生徒の意識調査

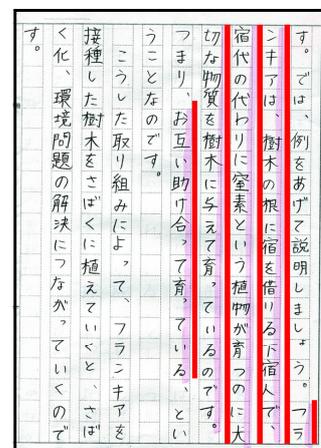


図6 生徒作品

## 6 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

- ・ 読解の過程において、百科事典と教科書を比べ読みさせることで、文章の特徴に気付かせ、筆者のものの見方や考え方を読み取らせることができた。
- ・ 「比喩表現」に着目させて、紹介文を書かせることで、意欲的な活動でき、自分の考えをもたせることができた。
- ・ 紹介文を相互評価させることで、新たな発見や感動、共感や批判などをしながら、ものの見方や考え方を広げさせることができた。

### (2) 今後の課題

「比喩表現」を中心に読解させ、表現活動に取り組んできたが、他の表現技法においても、有効性を検証する必要がある。

### 《引用文献》

- 1)3) 文部科学省 『中学校学習指導要領解説 国語編』 1999年 東洋館出版社 p.17  
pp. 2-3
- 2) 安藤 修平 監修 『読解力再考』 2007年 東洋館出版社 p.10
- 4) 井上 一郎 『読む力の基礎・基本～17の視点による授業づくり～』 2003年 明治図書  
p.55